古い思い出

阿部賢一

古い卒業生の一人として母校同志社が今秋創立百年を迎えることは大きい喜びであり、また感概無量なものがあります。私が数え十四歳で同志社普通部に入ったのは明治三十六年（一九〇三）の春でしたから、新島先生没後十三年目でした。それから卒業するまで五カ年を寮生活で送りました。毎朝七時半からチャペルで生徒が集まり、讃美歌を歌い、先生たちがまわりもちで講話をし、それから彰栄館の教室に行きます。一年生の頃の生徒の多くは地方から集まった四十数名だったと記憶しますが、今でも印象深く残っているのは、入学早々、大塚素先生が新島先生の伝や人物を実に熱心に、判りよく話されたことです。新島先生のことは兵庫教会の日曜学校で武田猪平牧師から聞き、それが縁で同志社に入学したのでしたが、大塚先生の話を聞いて感心し、デビス先生著、山本美越乃氏訳の新島襄先生伝を買って読みました。大塚先生が、新島先生が同志社創立に当って「自分の志は二百年をまって達成されるだろう」と言われたことを説明しては涙でくもり、熱情あふるる話をされたことは、いまも大塚先生の風貌とともに、感銘深いものでした。

教室では、どの先生も課目に熱心で、聖書やキリストのことは何も話されませんでしたが、それらの話は寮生活の間に先輩や上級生から聞きましたし、新島先生がよく言われた自由教育・自治教会とか、同志社は良心を手腕によって発揮する人物を養成する学校だとか、その意味は最初のうちは判りませんでしたが、年を重ねるに従って判り出したようです。とくに自由の精神や人間尊重の意味が判り出すと、これこそ自分にとっても何よりも大切なこと、と自覚し出したと思います。新島先生が誰に対しても「さん」と呼ばれたこと、それが伝えられたのか、どの先生も生徒の名前を呼びすてにせず、私が同志社にはいって最初の教室でも生徒を点呼するとき、エービーシー順に私を最初に「阿部クン」と呼ばれたとき、小学校で呼びすてにされた私は、うれしくなって、これがこんど入学した同志社か、よい学校にはいったものだ、と少年心にも誇りに似たものが湧きあがったことを今も思い出すのです。

当時、校長は片岡健吉氏で衆議院議長の人でした。青年

時代には板垣退助と共に武士として戦い、後に自由民権の闘士として政界に名を成した人です。その人が校長ですから、私たちも片岡校長のお話を聞きたいものと思うていました。ところが、秋の運動会が、上賀茂神社境内の芝生で行われていたとき、亡くなられた報知に接して運動会は中止され、みな悄然として学校に帰りまして、その夜は神学館で祈禱会が行われました。数日後に片岡校長を悼む新体詩を先生の湯浅半月氏が発表されました。半月氏は湯浅八郎氏の叔父に当たられ、日本新体詩の草分の人です。その歌詞は、「民権自由西海の……」に始まる三節のもので、曲もよく、生徒らもそれを歌い、片岡校長を偲んだものでした。その歌詞は明治三十六年秋の古い記録か何かに残っていると思いますが、幸いにして見つかれば、私もそれを見たいものです。

当時の同志社は現在と同じくよい環境に在りまして、彰栄館、チャペル、理化学館、神学館と図書館と、いずれも煉瓦建築がほどよく配置され、これを囲んで東寮、西寮、北寮、それぞれ四、五棟があって、私もあちこちに転じました。食費は米飯が四円十五銭で、麦飯が四円でした。日露戦争のとき、脚気病が軍隊や青少年の間に流行したので軍医総監高木兼寛博士が根治法として麦食を奨励したのにならったのだといいます。寮生活をいっそう良くしたのは毎週金曜夕のチャペルの祈禱会の後で、数人が連れて先生宅を訪れ、奥さん達もまちかまえてくれて、暫らく先生の四方山話を聞いたことでした。また学校は、一週五日制の授業で、土、日の二日は自由行動でした。比叡・愛宕は何度登ったか分らないし、ビワ湖のボート遊びには往復歩きました。いわば、学校も寮もスポーツも山川の自然も、同志社の生徒にとっては、大きい教室であったように思います。

ついでに……私の前年度の卒業式に珍らしく京都帝国大学総長といういかめしい肩書をもった岡田良平氏が来て祝辞を述べられました。話の中で、教育を鉄道にたとえ、国民の教育は国有鉄道の如く国立の学校が行うが、私立の学校は電車と同じく補助機関だから、そのつもりでしっかりやってもらいたい、という意味のことを言われました。私はこれを聞いてコツンときました。同志社は新島先生の理想と使命をもって創立された独特のもので、断じて補助機関ではない、と心中憤りを感じたのです。ただし、口に出して野次ることもせず、自分を抑えたことも遠い少年の頃の思い出です。

私は、寮生活を含めて、新島門下の諸先生の教えを受けたことを感謝しておりますし、後に十年前後、教壇に立ったのですから、なつかしい母校同志社です。

創立百年を迎えた同志社が、創立の精神に立ってますます発展し、その使命達成のために努力せられることを祈ってやみません。

（明治四十一年普通学校卒・元早稲田大学総長）

同志社一〇〇年に寄せて

田邊繁子

私は普通の女学校を卒業して、あこがれの同志社女学校の英文科に入学した。場所は京都御所の北、相国寺に隣りし、建て物は、赤煉瓦づくりに、みどりの芝生が広がっていた。廿歳前の乙女心が、夢のようにうっとりし、上級生の人々の姿に見とれたりしている入学したての頃である。友達と芝生に坐っていると誰かが近よって来て、ポンと肩をたたかれた。美しい外人婦人の先生が話しかけてこられたのである。私は驚いてしまった。先生と生徒の間がらにこんな美しい人間の交流があるということにびっくりしたのである。前の学校の時とちがって、先生は同志社においては、ぐうっと私に接近された。

毎朝のキリスト教の礼拝、讃美歌、おいのり、それに海老名弾正先生をはじめ他の先生方や、同志社を愛して、おたずね下さった方々のお話等、まことに心にしみる毎朝があった。殊にキリスト様のこと、あるいはキリスト様のお言葉には心を打たれ、ある時は、その日以後私の言動に変化が生じた程であった。

ミス・デントンにお教えをうけたことは、又大きなしあわせであった。礼拝に遅刻しても「泥棒泥棒」と連呼して追っかけ、あるいは教室毎に入って来てさがされた。机の間にひれ臥してかくれた私共悪い生徒たちは、逃げながらも先生の御人格の感化を非常に受けたのである。

海老名弾正先生の御熱意で文部省が我が国では、はじめて同志社大学に男女共学を許した。私は大正十四年四月に法学部に入学し、昭和三年三月に法律学科を卒業したが、法学部に私より一年先に盛口婦美子姉がいられ、その方と私だけというアンバランスの共学だったが、私は実にそこで大きな収穫を得たと思っている。そこでもやはり海老名総長をはじめ諸先生方、事務の方、入口の受付のおばさんに至るまで、皆が声をかけ合い挨拶を交わす程のしたしさを持っていた。教壇の先生と学生という間だけでなく、学生の私たちは、よく先生をお宅におたずねした。談笑の間に、先生の御人格から受けるものが多かった。つまり、校祖新島先生の御心を常に心に持ち、先生も学生も、人間として連なり一つになっている一体のようなあり方であった。

女子学生のための休息所には毎日毎日バートレット夫人

が来て下さったが、男女を問わず多くの学生をたえず梨の木町の家に招かれ、何くれとなくもてなして下さったバートレット先生御夫妻は、又忘れることの出来ない同志社の御存在だった。御夫人の慈愛にみちたおまなざし、やわらかい御表情に、やわらかく美しいお声、ほかにもこうした御立派なお人柄の先生が、外人、日本人を問わず沢山いらしたと思う。つれづれ草を教わった三輪先生は、つれづれ草の言葉を通していつも人間を語られ、人間愛を説いて下さったのではなかったか。私は廿歳前後にかけて六年間この同志社に学んだことをほんとうに感謝しなくてはいられない。

去る昭和三十五年であった。アメリカに旅行してニューヨーク近くのバートレット夫人をおたずねした。お嬢さんのアグネスさんに駅に迎えられ、夫人がアグネスさんと御一緒にお住みになっている野中(のなか)の一軒家に車はとまった。お年召された先生がむかえて下さった。先生と相抱き、頬を合わせ、二人は泣きつづけた。ついに、アグネスさんがハンカチを二人に持って来て下さった。二・三十年もの歳月にも失せない愛情関係、同志社が人間愛に結ばれ、新島精神によって、一体となっていた愛の学園だったからだ。百年は過ぎた。今後の同志社もそういう学園であってほしいと願っている。

(昭和三年大学法学部卒・弁護士)

おう・ぜむ・ぐっど・おうるど・でいず

中村鋭一

なつかしい。ただひたすらに。同志社外専米英科に学んだ三年間。クラス・メート約五十人は同じ顔ぶれで、同じ教室で毎日六時限の授業を受けた。旧制中学と同様で、単位制ではなかったのである。

Oh, them good old days.—あー、彼の良き古き日々よ。

昭和二十二年入学、二十五年卒業。食い物はなかった。しかし青春はあった。森君はいつも二時限目の授業中に弁当を食った。そして三時限目にうしろの窓から飛び降りて脱走した。飛び降りるときに踏み台にした机が、何しろガタガタだったので、はずみでガラガラとこわれ、彼は頭を打って失神したことがある。

すばらしい美人、英会話の百々(どど)先生の時間は生徒にとって書き入れだった。みんな先きを争って前に座りたがった。先生はいすに腰をおろし、高々と足を組んで教え

てくださる。中央最前列の席は正に特等席だ。百々先生の時間になると、妙にみんな鉛筆を床に落とした。ひろうふりをしながら、たっぷりと下から鑑賞する。やさしい、それでいてきりっとした先生だった。卒業のとき、何人かずつに分けてお宅でお祝いのパーティーに呼んで下さった。年頃のお嬢さんがいらして、何だか、がっかりしたことを覚えている。

昼休みには、ウクレレをひいて歌を歌った。小薗君は英語の小唄がうまかった。当時、"Now is the hour"——今し別れのとき——というのがはやっていた。"When you return you'll find me waiting thee" というのが最後の文句だった。小薗君は優等生だったから発音も正確で "return" を、われわれは「リターン」と歌ったが、彼は舌を巻いて「ブリタン」といった。彼には「ブリタン」というアダ名がついた。

毎日、昼になると、いっしょにくらしている彼女が弁当を作って正門まで届けにきた。H君は御所で二人で仲良く食った。H君たち二人がグンと大人のようで、まぶしいくらいうらやましかった。私は馬術部で武骨一辺、馬ばかり乗っていた。大事な試合の障害飛越で人馬てんとうをして、先輩にどつかれた。Fさん、Kさん、Hさん、たまらんくらいなつかしい。

関六リーグ戦、特に同立戦になると、応援団が門のところに張番をして有無をいわせず球場に運ばれた。「相国池畔に豪気か妖気」が満ちるという応援歌の一節を、そこのところだけ覚えている。

あれから二十五年たった。いまは放送局で毎朝二時間十五分しゃべっている。野球であれ、相撲であれ、優勝すると「全国の校友諸君、共に声高らかに歌おう」と私はカレッジ・ソングを絶叫する。諸先輩の反響は大きい。「何十年ぶりにカレッジ・ソングを聞いた。鋭ちゃんといっしょに泣きながら歌った。同志社人であることの誇りと喜びが腹の底から湧いてきた。」——こんな風な手紙を頂戴したり、また直接にどれだけ多く聞いたことか。

昭和四十九年、阪神タイガースは優勝を逃がした。私はファンとの約束を守って頭を丸めた。剃髪式の間中、私のうしろで短調に編曲したタイガースの応援歌「六甲おろし」を歌い続けてくれたのは同志社グリー・クラブの諸君だった。仕事柄、あちこちに講演に寄せて頂くことが多い。どこへ行っても同志社を出た人がたくさんいる。中年以上の人はかならずその職場の中堅管理職か重役だ。うれしい。その同志社が創立百年を迎えた。私は毎年一回は若王子へ新島先生のお墓参りにゆく。むかい側にある五平さんの墓にも「先生をよくお守りして下さいよ」とお願いしてくる。

新島先生はどんなによろこびだろう。

同志社百年万歳。校友諸君、声を限りにカレッジ・ソングを絶叫し、共に、このめでたさを祝おうではないか。

（昭和二十八年大学商学部卒・朝日放送（株）ラジオ製作部プロデューサー）